

天
...

911.3
八
頁

911.3

八

夏

夏



俳林良枝集

夏之部

雙雀庵水壺編集

夏

關を陽・南方南に任たり陽・柔物を任者・在時夏も此に
八候あり伏たしして則宮まより日・夜二たより柔物を任
長大ありし志毛ふあり(覆)夏は河のありはとと魚をさるる
・美・帝・祝融・朱明・昊天・蒸炒・立夏・仲呂

四月

・卯月・卯の春月・儀を卯月・花時月・西陽月・首夏
・並夜・金月卯月といふ卯の春月といふ春を果せるなり
おもしろし出さるる未を卯月といふなり

卯中を卯の根を卯の卯なり
古岳
古岳
古岳

意為表の上為為
白重のまじり

ひらり後々うしほふ原ぬまらふ

菊

又石名あり後壹の唱うり那

由松

類く此名ありし人の来り

波路

むく部玉まかりしやあはれ

森久松

おきしころもあまをせりあらし

菟菜

さきし人の来りもせりし更衣

不徒

白重

観音の侍よりほくし白重

古
穴
壺

氏よりおきしあがり虎衣

古
碩
布

すい毒の毒まきあき白のまじり

糖
月
子

ゆり達の袴やおのりふりし

壹
長

未也州のまきなりけりぬ白重

仙
月

やうう屋をぬきり目立やあらし

月
昇

出せんのらあきしあらし

甘
茶

卵の花衣

表白重まじり
あふ

給賈

給着し一日毒ふあ相しり

雨
山

あきしあらしあらし給のあらし

あ
水
山

あきしあらしあらしあらし

除
衣

綿貫

碓井のら 袴のふり 下 原照

綿貫やや ぬいすの 下 下外

引のふり 糸のふり 水 壺

夏羽織

引のふり 糸のふり 青 圓

青 簾

〔藻〕 青葉のふり 糸のふり 四月一日 袴のふり 糸のふり 一説 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり 袴のふり 糸のふり

龍頭太

團子あり抄社田中の社源田産神ありはありまありの
善い四葉の先へくる面を産取たりしあり

志生々々ありしあり産取たり 産取たり

神の歳はありありあり産取たり 産取たり

産取たりありありあり産取たり 産取たり

梅の宮祭

羊上夏日民氏の祖神也山懐本宮産取たりありありあり
人産取たり産取たりの産取たりありありあり産取たり

とあり

山懐本宮ありありあり産取たり 産取たり

大神の祭

申日・福・當麻祭 上申日 山科祭 上巳日

平野祭

上申日・松尾祭 上申日 杜本祭 上申日

水屋の能

四日五日南都新水屋の社 當宗祭 上申日 西内之 十日 物取あり社

廣瀬・龍田祭

此兩社大和より産取たり大忌神龍田八尾野はあり

山崎日の使

二日或ハ 八瀬祭 産取たり馬よま

擬階の奏

七日或ハ三月列見の時の成選の産取たり式兵二省あり

和風子やあり産取たり産取たり とき 産取たり

産取たり産取たりの奏法ありのあり 下元 産取たり

灌佛

龍花會・五香水・浴佛 産取たり産取たり産取たり

産取たり産取たり産取たり

灌佛や産取たりのありあり一書集 不産

佛の産湯

うんばやまうしんばあうちり
と名人の湯を佛の産湯うれ
托抄やうりあき私の産湯うれ
下
ト外
高栞

佛生會

生うると光うを影の件うり
人のあつさうのうらや生美
世負
多知女

花御堂

花を忘れし花御堂
世負
花と山の作ううまうと花御堂
世負

人の世を想ひあき嘆也と花御堂
世負

あう人の愛れはらや花御堂
世負

花御堂あうと花御堂
世負

花御堂あうと花御堂
世負

花御堂あうと花御堂
世負

花御堂あうと花御堂
世負

花御堂あうと花御堂
世負

花御堂あうと花御堂
世負

花御堂あうと花御堂
世負

あいらへりていづれも易い子もさる 素月

色しうもつちきよのよもあんなに 祐

大矢敷 羊依志三十三回堂の矢敷毎年四月廿四日廿五日のまきの節
晴天を仰むまのつり 大矢敷 風のちのちのち 此

本 いゆをささぐりて 大矢敷 仙月

息 つぎ 大矢敷 此

大矢敷 大矢敷 不

向日明神祭 午辰 久世祭 申巳

嵯峨祭 申亥 向日明神祭 午辰 久世祭 申巳

清水地主祭 九月 當麻法事 十四日中坊の屋の
終り此まゝとす

江州八幡祭 申 午安天神祭 午日
永原

土塔會 十五日天王寺 菅官祭 申午 花供 廿一日
由衣を替る

神祭 忌さき 神取 神意忌さき
説加茂の辨り

日光祭 社家説し
社家礼八寛永十三年四月十七日始り

日光の糸や樹の志 申 呂風

あつる日や 下 三草

天々の 下 冥

松前渡 下 葉

松前渡 松前渡

初は四日ハ秋を出岸一九月を限り一擇ふは
依り候を云々上を秋と云云

秋の夕べも静き日和
葉落

あつたへ追風の吹く水
飲席

神風や秋の夜は帳のたし
水盃

梅天

梅名の天等
をいふあり

小満節 四月の 和清の天

源和

梅一
あり

短夜

短夜や芳の候もむね向

乙也

短夜の月ものそくやせつる意

乙子

いづる夜もほろりやまをり

田采

短夜はり候むね一津の意

いづるは仕合を一夜や雨のそり

明あき夜のあよそや湖の思

水青の候り雪えをり明やき

阿弥あき夜よ耳に玉の風

麥の秋風

・麦秋は満節の
末なり

麦秋や穂のこころの海舟
古外

麦秋やうらな廣間は猫むらり
色海酔

短夜はつらつらとあつた
葉落

麦新

雨のよきうらやまの草子花
杜若雨よりのうらやまの草子花
下
文

布のよきうらやまの草子花
下
十

水うらやまの草子花
下
十

水うらやまの草子花
下
十

葵草

・ニ葉叶
・葵うらやま
・からいりやま
[催うらやま]・立葵こけやま

柳うらやまの草子花
下
十

兄の草子花
下
十

仲の草子花
下
十

白及

[和] 生葉を煮て茶を飲む。秋葉は酒に漬けて飲む。
[和] 生葉を煮て茶を飲む。秋葉は酒に漬けて飲む。
[和] 生葉を煮て茶を飲む。秋葉は酒に漬けて飲む。

又和色二種あり。根はききやぶのめく
白を塊りたり。又和色あり。

中の子を煮て茶を飲む。白及は

蕙

[和] 和色蕙と稱する。白及の類なり。葉大なり。山中に生
る。白花。葉を煮て茶を飲む。葉を煮て茶を飲む。葉を煮て茶を飲む。

此根葉のよき
うらやま

鉢の蕙を煮て茶を飲む。白及は

風車花

[和] 纏枝牡丹葉なり。葉葉は鉢の類あり。花八弁あり。葉を煮て茶を飲む。葉を煮て茶を飲む。葉を煮て茶を飲む。

風車花のよきうらやまの草子花
下
十

葉のよきうらやまの草子花
下
十

羊蹄花

羊蹄根

時珍曰羊蹄の葉の長さ尺葉半の右に... 夏に花を結ぶ羊蹄根を以て名を... 虎瘡を治するを以て虎草と名は... シとのりりり中交枝より... 亦二種ありり中交枝より... 羊蹄花と羊蹄根を以て名を...

羊蹄花と羊蹄根を以て名を...

甘草

石解花

石解花を以て名を... 石解花を以て名を... 石解花を以て名を...

砂石を以て名を... 砂石を以て名を...

石解花を以て名を...

佳石

苜蓿

苜蓿を以て名を... 苜蓿を以て名を... 苜蓿を以て名を...

苜蓿を以て名を... 苜蓿を以て名を...

苜蓿を以て名を...

佳石

古草

古草を以て名を... 古草を以て名を... 古草を以て名を...

古草を以て名を... 古草を以て名を...

古草を以て名を...

佳石

蓮の浮葉

蓮の浮葉を以て名を... 蓮の浮葉を以て名を... 蓮の浮葉を以て名を...

蓮の浮葉を以て名を...

佳石

綿時

綿時を以て名を... 綿時を以て名を... 綿時を以て名を...

佳石

茶先草

昔よりも次春のしゆりや茶先草
十條
たのくよんそもとあまを茶先草
菓吹

玉卷葛

玉巻り葛もつえさや強り雨
松頂
おろし葛も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

玉卷
芭蕉

玉巻り芭蕉もつえさや強り雨
松頂
おろし芭蕉も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

紫羅傘

紫羅傘もつえさや強り雨
松頂
おろし紫羅傘も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

紫羅傘もつえさや強り雨
松頂
おろし紫羅傘も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

紫羅傘もつえさや強り雨
松頂
おろし紫羅傘も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

紫羅傘もつえさや強り雨
松頂
おろし紫羅傘も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

紫羅傘もつえさや強り雨
松頂
おろし紫羅傘も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

紫羅傘もつえさや強り雨
松頂
おろし紫羅傘も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

紫羅傘もつえさや強り雨
松頂
おろし紫羅傘も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

紫羅傘もつえさや強り雨
松頂
おろし紫羅傘も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

著 莪

著莪もつえさや強り雨
松頂
おろし著莪も葛もさおひさ建ふり水
菓吹

聖粟の花

活し其ハ花をましくもくは幸一の花 古外

うとあつととハいものもくを芥子のむ 甘菜

たふさ草しやをせし又まうふ花 一ツ 梅影

宝鐸花

【箋】 佐和の桃打は云物是よりくを茎のそそ一尺斗葉は花車
よれりちとふとく一白きをふく内よまき彩あり葉は三節

宝鐸は花のつるをこれにておまの
宝鐸よはとくに葉をまよふ

黄鐘花は花よまのせし名よとふ 桐左

花のつるをまのりつるえき宝鐸花 佳若

鴨足藤

【箋】 鴨足のまよふ云石上よ生る
小なるなり

思志のぬおの志よりや津耳草 海

芳光のおよひつるや鴨足州 若井和

山の井花岩を流すやおんまき 粟欣

石藤

【箋】 又子及とも云葉白の
二種あり

石藤花は花のまよふ葉のぬき 雙岳

岩藤花は花のまよふ葉のぬき 下リ 専志

石藤花は花を葉より出る花 卜外

躍花

【箋】 踊花は花のまよふ葉のぬき二葉上生る云四月紅白のまよふ
葉母叶は花の國をまよふ小葉は花の形人のまよふ

【箋】 踊花は花のまよふ葉のぬき

花よ温るを花をまよふ 州 田左

印のつめも又葉よりやをとりし叶

休むるく風のそたしをとりし花

茶挽草

茶を挽く草をいふ
依ては茶にあり

園鳥麦也一名墨麦田中より自生す苗葉小麦に似たり
小葉より種細し小思種粒を爪の上より取せ六粒出さるる葉白

まろく花をおきしころの葉茶挽草

影の葉よりとりしや西日の葉挽草

柏散

貞臣送友より又二説
秋より依て在壇

葉のまろくを散らしたる庭の柏の形

申はかり葉ハ思はるるまろくを柏ちる

柏ちる日けり温泉水の厚きうれ

葉中よりとりしやをとりし柏の形

卵の花

●葉をとり●卵木
●葉根卵の木

まろくくをとりし卵のまろくをとりし葉

卵のまろくをとりし卵のまろくをとりし葉

又は卵のまろくをとりし卵のまろくをとりし葉

卵の花をとりし卵のまろくをとりし葉

うねるや卵のまろくをとりし葉

卵のまろくをとりし卵のまろくをとりし葉

巢吹

下カ庭花

鳥將

優く

下カ葉次

金文種

花海

樹竹

由松

葱玉

蓮歩

葉雲

鳥芳

下カ文書

柳の花を鼻突かむや繁き馬 下玉法

國是此より雨ふる日

やせよに同じ柳のむくくを雨のふ 葱玉

桐の花 音の宮もあはれを木を桐の花 右 尚白

世還へりし海向あり起りの花 上毛 葉堂

近よせよ葉よりくをんり 栞のむ 右 柳圃

里の名は是れえあまよきりのむ 海之

若楓 美柳しよよ宮のこゆるをみ起り 右 蒼地

前よりよみへ酒く井の水や美の柳 美路

あまののりすうまへや美の柳 美路

あまの葉は秋ををせりりよこの柳 美路

赤はよき宮の柳やせやそのかへり 牛唐

あまををててあまを木海く結る花 上 新史

旅よりよき海あり山よ余きひもつ 下 玉頑

若葉 雨近し毎波のまよよこの葉の美 由 雲

眼の上は雲吹をうふ美路かへり 美路

解ふ目の白しよよをこの葉は 柳 柳什

朝のきのの穂よけくよき美をりれ 上 堆雲

若葉の
紅葉

古の葉もまろりや若葉のを巻り 下 魯水

さうさうのさうさうの葉の遠くの葉 下 閑翁

日の葉もさうさうの葉のさうさう 下 春郎

我くもさうさうの葉の紅葉うれ 下 仙月

あつたまのさうさうの葉のさうさう 下 巢次

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 祐之

わささ葉のさうさうの葉の古井 下 渭水

病葉のさうさうの葉のさうさう 下 仙月

病ワクラハ葉

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 祐之

病葉のさうさうの葉のさうさう 下 仙月

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 桂堂

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 依友

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 壹長

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 子布

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 由依

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 素然

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 史之

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 由依

さうさうの葉のさうさうの葉のさうさう 下 海路

草木の茂

取らるる木也。葉の切端。 芳州

波うらふ木もむくなく。 又川一室

夏木立 結葉

此先よ里にけり。 露聲

夏木立の根を日ハ葉は赤り。 雨鳥

樹のうら見より。 葉吹

さあくよ人の世をむ。 溪鳥

樹の赤く見え。 結葉

葉さくらや。 右 道長

新樹

葉櫻

木下闇

常盤木の落葉

葉柳

葉さくら。 右 龍成

葉さくら。 右 松溪

木下闇。 右 道長

木下闇。 右 龍成

木下闇。 右 龍成

木下闇。 右 龍成

木下闇。 右 龍成

木下闇。 右 龍成

木下闇。 右 龍成

美人草

贈 花をいへりて 美人の心は 花をいへりて 美人の心は 花をいへりて 美人の心は

夏あり

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草

繡毬花

繡毬花をいへりて 美人の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草

木下開

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草

枳殼の花

枳殼の花をいへりて 美人の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

鷹爪丸

鷹爪丸をいへりて 美人の心は 花をいへりて 美人の心は

鷹爪丸の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

美人草の心は 花をいへりて 美人の心は

根をせむはうて是光州の味なり
葉次

花咲く扱めとむむせくまの如く
花嚙子

鐵線花

二月苗宿根有り生をいつ州より傳車の説あり葉を二
枚の花は七葉あり花をいつく二枚くは葉をいつく

葉をいつく花をいつく
葉は丸く黄あり

花をいつく花をいつく花をいつく
花嚙子

鉄線の花をいつく花をいつく
其葉

白丁花

花はよく急柄を一やうの折柄へて舞く一或ハ雨落し
花をいつく四月小白花をいつく又同様にて花をいつく

花をいつく
花をいつく

折柄の花根をいつく白丁花
水壺

麥門冬

葉はよく長き一尺半許葉は細長よく葉は後折れ
花をいつく花をいつく花をいつく

花をいつく花をいつく花をいつく
花をいつく

花をいつく花をいつく花をいつく
花をいつく

山菅の花

葉はよく和名如彼知付の末考又同一は茶葉類の菅よれ
花をいつく花をいつく花をいつく

花をいつく花をいつく花をいつく
花をいつく

山菅の花根をいつく花をいつく
花をいつく

厚朴花

花をいつく花をいつく花をいつく
花をいつく

花をいつく花をいつく花をいつく
花をいつく

要の花

花をいつく花をいつく花をいつく
花をいつく

九月十九日
癸亥

練塘の内や露の花はしと木

高島

藪椿

花をもちり(和)女貞和名木豆の末は女貞は木
梗捺須三毛知の木花椿木より

練塘の春のつくはあまの藪椿

下三郎

よく又中ふあやりの花は藪つをき

花月

藪つをきと葉を花よりして又中ふ花

由儀

折る折るの花より中ふの藪つをき

葉次

櫻桐の花

又えとあつら興はる花や櫻桐の花

常晴

葉をみて桜はる花や櫻桐の花

久業

毎日の雨はさつと櫻桐の花

由儀

さつとの花はへつとあまの葉より

甘茶

さつとを板を新や桜の花

素心

さつとをのらとせとてあまの櫻の花

花咲子

花付了とあまの櫻の花

不二丸

あまの花をあまの種や櫻の花

庭花

花は葉はあまの櫻の花

閑水

櫻の花はあまの櫻の花

溪菊

踏

踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏

山 水 田 田 田 田 田 田 田 田

蓄 薇

蓄 薇 蓄 薇 蓄 薇 蓄 薇 蓄 薇 蓄 薇 蓄 薇 蓄 薇

田 田 田 田 田 田 田 田 田 田

若 梨

若 梨 若 梨 若 梨 若 梨 若 梨 若 梨 若 梨 若 梨

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

釣 慈

釣 慈 釣 慈 釣 慈 釣 慈 釣 慈 釣 慈 釣 慈 釣 慈

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

篤の子

篤の子 篤の子 篤の子 篤の子 篤の子 篤の子 篤の子 篤の子 篤の子 篤の子

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

竹の子

竹の子 竹の子 竹の子 竹の子 竹の子 竹の子 竹の子 竹の子 竹の子 竹の子

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

花 橘

花 橘 花 橘 花 橘 花 橘 花 橘 花 橘 花 橘 花 橘 花 橘

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

露柳の成りし影のまをりし河
花は

ふきの葉やまをりし影のまをりし河
不二

水鏡に片ありやあまの影あり
由像

蓼

利根草

人よあまの影ありやあまの影あり
蓼の味

蓴菜

蓴菜やあまの影ありやあまの影あり
古山

引けりし江の影まをりし影あり
古山

蘭の花

蘭の花の影のまをりし影あり
種

あまの影ありやあまの影あり
種

郭公

郭公の花の影のまをりし影あり
山時香・四季の田長

あまの影ありやあまの影あり
魚

あまの影ありやあまの影あり
古山

あまの影ありやあまの影あり
十條

あまの影ありやあまの影あり
其仙

あまの影ありやあまの影あり
葉

あまの影ありやあまの影あり
花

あまの影ありやあまの影あり
三

あまの影ありやあまの影あり
教

杜鵑啼を雀の夜鳴の如く 苑成

鐘をそのまゝの人よりそそぎ去 上毛 然冬

鐘撞くを何ぞやそそぎや不ぬ帰、為得

源山鐘をいつもあきしを杜宇、三浦世

あきしをいつもあきしを杜宇 三 葉操

閑子鳥

あきしをいつもあきしを杜宇 三葉操
あきしをいつもあきしを杜宇 三葉操

人しりり又つちを鳴や閑子鳥 古 風朗

閑古を鳴や水も鳴 岩のくふ 古 九美

見おろし〜山家や閑子鳥 古 漁藤

雨の日はあや〜閑子鳥 不係

伏せ鐘の鐘〜山家や〜 古 柳株

又〜あきしをいつもあきしを杜宇 古 葉堂

鳩〜あきしをいつもあきしを杜宇 古 弘湖

汲〜あきしをいつもあきしを杜宇 古 成任

あ〜あきしをいつもあきしを杜宇 古 菊深

鶺鴒〜あきしをいつもあきしを杜宇 古 五徳

古利根〜あきしをいつもあきしを杜宇 古 一掃

宿〜あきしをいつもあきしを杜宇 古 留水

鶺鴒

葭原雀

葭の原に雀の鳴く声は
 花海
 響く
 田原
 庭花
 菓欣
 葭原雀
 きらきら
 鳴く声は
 花海
 響く
 田原
 庭花
 菓欣

蝙蝠

砂川よちりききやけり
 龜友
 二重のよちりききやけり
 雷心
 風をよちりききやけり
 滅之
 葭原雀やけりききやけり
 古山外
 葭原雀やけりききやけり
 古山外
 蝙蝠やけりききやけり
 中野
 蝙蝠やけりききやけり
 中野

救喰鳥

救喰鳥
 獲
 此を一切の禽史よちりききやけり
 中野
 救喰鳥
 獲
 此を一切の禽史よちりききやけり
 中野

鹿袋角

鹿角の角筒を鹿角と云ふ。鹿角の角筒を鹿角と云ふ。鹿角の角筒を鹿角と云ふ。

鹿角の角筒を鹿角と云ふ。鹿角の角筒を鹿角と云ふ。鹿角の角筒を鹿角と云ふ。

水壺

翡翠

翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。

翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。

祖師

翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。

玉頰

翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。

壺長

翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。

芝蓋

翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。翡翠の玉を翡翠と云ふ。

二条

通鴨

通鴨の鴨を通鴨と云ふ。通鴨の鴨を通鴨と云ふ。通鴨の鴨を通鴨と云ふ。

下名

老鶯

老鶯の鶯を老鶯と云ふ。老鶯の鶯を老鶯と云ふ。老鶯の鶯を老鶯と云ふ。

老鶯

飛蟻

飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。

其以

飛蟻

飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。

其則

飛蟻

飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。

其則

飛蟻

飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。

飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。飛蟻の蟻を飛蟻と云ふ。

秀子子

ユ
コ
薄

其の薄きものあり其の上は薄くはぬを
つらりとむすものあり

連里子

カヤメ
蟬の子

蟬の属するは火のありありの両片張きなり尺余五分
寸甲斐子を生まるる(夏) 蟬の子は去るる壳の外板の下り

是れをうらうらと用ひてはむす

水巻

卵あり

枝蛙

枝蛙ありや木の葉の間に入る

上サ
虫英

見せしむるはふらふらあり壳は種

下毛
種好

鳴くはゆるり鳴くは新や枝はあり

葉依

蛸の子

蛸の子はむすものあり枝蛙

子ノ
左

蛸の子はむすものあり雨の形つらむ

子ノ
雄飛

蛸の子はむすものあり美子

下サ
ト外

蛸の子はむすものあり尾

テハ
雪凶

蛸の子はむすものあり相魚

虫
白

蛸の子はむすものあり相魚

虫
相魚

人の子はむすものあり相魚

虫
相魚

初鰹

鰹丁は叩てはむすものあり

在
在

仕合や新母子より初相魚

節
之

生 扇 郎

彼を起すのきりしをえりね魚舟 来我
 船りねき江底海遠しをりね魚 古賦
 嗚りり雪も春さふりね魚舟を 羨交
 老のよと持てね合ぬね魚りね 羨
 初ね魚にねをねしきをねしりね 上元 羨
 趣りりやね買人のけりね魚舟 羨 白外
 兼ねねり人のあたりね魚舟を 羨 仙友
 生首やふりりやうりね魚舟 羨 佳首
 夕けりき扇さうりり通るりね 羨 孤竹

木 扇

此始りて世をよめる人の扇り手 甚城
 物りり扇やねむむきり手 不 由
 ありり佳山はなうりりね魚舟 羨 森松
 空さき風や扇りりら表、関水 関水
 雪のりり不さきしき扇りり 羨 葵史
 初りり男をさき紙のきや白扇、帯結 帯結
 夕や扇のきりりや扇のきりり 下サ 有隣
 夕や扇のきりりや扇のきりり 下ハ 土扇
 物きり扇をりり能廣男のきり 下毛 圃涼

團扇

たしなまき扇巻じや門吹

一具

坐を之て了木を見やりて扇式

龍水

垣城よき書の写ゆりしあまうを

精中

是より人坐息ふ坐みけり法徳扇

菓欣

坐扇まきゆりりし立や竹麻凡

スルカ

見込

木布

麻布葛布夏布等の曝さるるものを生坐よ云
生布よ同

坐白坐よししをけあき木布云

坐

其泉

汗取

汗取や舟を結習のしり早汗

取付

汗拭

汗拭木あう人やまきあく汗ぬくじ

取地

帳

あしら地よまき汗あぬじまきり

葱玉

りしあき心の垣や帳

香以

帳屋をまきえき六吉ゆりまきり荒

白人

草方州や帳屋つりまきのひまきりぬ

草城

白しらる帳や相取のすまきり

志考

帳よ月じやつりあきまきり

美里

帳屋よ月じまきり追痛より川

睡風

帳の月まきの風をり取帳より

朝陽

名取まきり寝るまきり帳帳

洲

蚊帳

襦

ハネトリクモ
蠅 虎

蛭

蛭 蚓 出

蚋

蚤

降雨よきやりののちむ蚊きり

下

同 玩

蟻もく人吉蟻紅蟻の之より水

水 壺

田の蟻や水より出りて

弘 竹

ぬきは是よりいへりぬ小田の蟻

下

文 志

出る若きを知りてそのき蟻蚓は

佳 若

是問ふる居るうちふりてさき危

由 儀

刺飛や表著るすの佃灰り

菓 欣

麻雲をへしせりや昔如くも

古

一 具

世の夢と悟せりて量りてを茶

甘 茶

汗の量も細きなりや名取川

葱 玉

ぬきはるる量も寝る世は舟泊り

草 字

寝る居るも日和を量りてを危

古

磯 石

量りての子の量りてを海より

古

折 圃

蠅をうつふりてを返し居る

古

漁 蓆

物を待たずや見たり居る蟻の業

古

波 臨

ひかりては露ありてを多き危

上

文 鱗

蟻一層をふりてを成るる

古

海 珠

蟻亦や量りてをりてを

古

味 風

蠅

青鷺

青鷺の出てゆく城の夜明けの

青柳

結夏

佛者の其十五日入りたる日を結夏と云ふ也七月十五日終る日を解夏と云ふなり此日安住し終るなり

州本出の秋を佛人云ふは

安居

形安忌期七位を居ると云程釋の要

月のまきこけもいもあはれ

茶枝子

食ふもまをさうつちを安居哉

文種

月花も忘るる人のあはれ

盛月

羨望も人々のけがれ

之州

夏行

懐きの秋もあはれ

如白

夏入

来たる夏の寒のさき

士致

おぼえの再をま

雪成

雲のらと雨をさ

金風

家まのつ我もさ

如春

夏籠

夏籠の夏花

夏籠の眼も

汗風

夏籠のやも

由儀

夏籠のやも

夏以

藥日

五月五日を
のり云ふなり

茶玉の風よ香のよの廣きき 茶葉子

茶玉や吹ぬきさる茶の香き 宋 鴉

茶玉やの希し死入灯のうつる 芳州

茶玉や煙を翻丸さるおりのまの 花海

茶玉ををされ心の有伴うれ 系 如 衡

茶玉は風よさるぬしと潤う香 下井 文 耕

茶玉を巻むと重のまのりき 下尾 築 次

茶玉の向ふはぬ白むの形 優 二

茶玉をおもふ子のよき茶玉 茶 山

茶玉をよむ茶玉の州の露 下サ 宋 氣

茶玉をよむ茶玉の香のり 能 桃 須

茶玉をよむ茶玉の香のり 能 桃 須

茶玉をよむ茶玉の香のり 能 桃 須

茶玉をよむ茶玉の香のり 能 桃 須

茶玉をよむ茶玉の香のり 能 桃 須

茶玉をよむ茶玉の香のり 能 桃 須

茶玉をよむ茶玉の香のり 能 桃 須

藥草摘

茶玉をよむ茶玉の香のり 能 桃 須

艾人 艾のやめ 蒿のやめ 門のやめ 優く

艾 虎

唐の蓬より席を造り思豆を煮り或ハ
香りのある小席を造り艾の葉より席を造り或ハ
了軒香を造り

いふきく 乾目の白ふ 艾席くれ 菊枝子

ミミと見をののすき 艾席ハ 瓶月子

いふきく 心まじしき 艾虎の解 袷之

肩すく 艾席ハ 僧水

乾ふき 風や 艾席の影あり 具矣

うらや 艾席ハ 單衣

削掛の胃

古の夷吾國をおそんとす一よる能く
我しのも一をま例より甲胃を單一 兵具を調 旌旗
を造りしものや 此蓋衣を今造

粉團を射る

増 諸部志 水部 向雲 唐の宮中より端五より粉団子
を造りしものや 此蓋衣を今造

桃印箭 赤印箭

増 五月青のちとちとちのきぬの篆文の
箭をまて 桃印箭と云ふおきて 思案を
赤雲箭を造り 兵をまて 是は桃印の事

百草を戦ふ

増 古の瑞年より 子を合せ 後原を
幸ふと云ふ事あり

人の心 赤雲箭 上梅楨

百草... 我を... 仙月

百叶... 五月杵

我を百叶... 菓欣

蘭湯を浴... 大

皂の羨... 菓欣

あつ... 菓欣

あつ... 菓欣

鳩鴿の舌を去... 菓欣

鳩鴿... 菓欣

競渡... 菓欣

競渡... 菓欣

競渡... 菓欣

浪風... 菓欣

浪風... 菓欣

水馬... 菓欣

水馬... 菓欣

騎射... 菓欣

騎射... 菓欣

寂勝講 賑給

後深殿にて初なる徒内儀座と云ふ事にも此よりあり
年中に於り五月のこけりともある事あり
〔を〕と申す事一き民よ米俵ふくさふふ事重宝中の條より
小路を於て授非使違承る事なきをいひ

賑給や力ものちの人小立中川里 藻粧

賑給や燈りのつ流り燈の巻 兼岳

賑給や人の中日のあ人の出る 兼岳

賑給やまのつゝあふりあふり 兼成

賑給やまのつゝあふりあふり 兼成

竹植日

五月十三日竹植日と申す又竹迷日と云此日竹を栽せ
いひあふりまをいひつゝあふり

休より急る日ゆりあふりて任給ぬ 尾村

竹植一人の雨間五日着るれ 兼成

異一人のあふり竹の植場なり 兼成

今種一竹のあふり一任むまじ事 兼成

竹植の竹のあふり一任むまじ事 兼成

裁りあふりあふりあふり竹のあふり事 兼成

竹のあふりあふりあふり竹のあふり事 兼成

狂吉御田植 廿八日松野住去 大原志 兼成

山田御田植 〔兼〕大神の宮田より五六尺の扇を供はり持の
先よつ事々神官あふりあふり見物の法より植まは

名あり

山形もやつと日あそびや内田扇 漢高

田のあそびも今こゝまをては田扇 猿月子

芒種の節 五月の中より

夏至 阿ら梅の空をそそぐ友玉のそそりて 優々

梅の雨 微雨五月の暮より才二の玉の日より梅雨と云り困り 困り

梅の雨 阿ら梅の空をそそぐ友玉のそそりて 魯心

梅の雨 阿ら梅の空をそそぐ友玉のそそりて 巨月

梅の雨 阿ら梅の空をそそぐ友玉のそそりて 由之

梅の雨 阿ら梅の空をそそぐ友玉のそそりて 春分

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前 飯前

五月間

皋月雨

五月間

五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間

五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間

五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間

五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間

五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間 五月間

五月晴

さみもせや仲の景きの時河子 下毛光
伸の末又雲先くらり 五月雨 豊
おろくや水山あきさつき晴 透例
七つふれよ海もあまき 五月晴 右
物もあけしとあふりや五月天 左
物もあけしとあふりや五月晴 豊
あふりよとあまき五月天 豊
遠志を星もさきさき 輝光
川下も細くさきさき 豊

五月闇

しつとくささき五月天 子布
黒色の雲はつらや五月天 葉居
火も焚きさきさき 上

黒船

星輝は五月の雲は白し 雨 上
白く 梅雨中の雲合をさきさき 豊
うも津やうあつてのうもさきさき 豊
とつと小雨あつてのうもさきさき 豊
とつと小雨あつてのうもさきさき 豊
とつと小雨あつてのうもさきさき 豊

黒船や波よさき 沖の島 乙也
黒船や波よさき 漁師町 豊
黒船や波よさき 沖の島 乙也

黒衣入也いふはてそる葉より里 下 赤岳

くはをくや葉よりらゆき残の松 樹石

ら黒船やもる穴床のまくら上り 拙誠

黒衣や水雪のくはる花 白き 水雲

白船

白船やもる舟進き佐屋泊 兼 茶交

虎の泪の雨

虎の泪の雨 舟進き佐屋泊 兼 赤岳

田仕のり出する路より席より 一 亭

今この世もよとと志く針や席より 子布

常衣のぬ日あり空ことらる雨 下 毛 秋月

常衣のぬ日あり空ことらる雨 下 毛 秋月

常衣のぬ日あり空ことらる雨 下 毛 秋月

常衣のぬ日あり空ことらる雨 下 毛 秋月

常衣のぬ日あり空ことらる雨 下 毛 秋月

祇園の御輿洗 三十日あり

てらちんや西無洗の衣をてらち 下 庭花

登退や西無あらしのしを焚て 由 像

世はくろくをいふもつらむにや花の
名をもかきとてあやむれば甚だ

魚もさるるもさるるもさるるも

藤花

半かき干しをりし花をかかみ

嵯峨

申酉の花

申酉の花園さきさきうらひなうらひな花よ多く生きたる花は梅より花を判
たう花葉のほのかにいそと云ふ

さきさきうらひな花をかかみ

下毛梅左

梅もさるるもさるるもさるるも

葉欣

さきさきうらひな花をかかみ

其園

真藤花

申酉の花をかかみ

上毛梅類

さきさきうらひな花をかかみ

梅雪

藻薊

丁刻をさるるもさるるも藻薊丁かき

刈割る藻薊や押あよ見ええり

竹南

さきさきうらひな花をかかみ

魯水

刈割る藻薊やあふ見ええぬ川

龜友

いとおもえん藻の花をかかみ

草車橋

藻よさきうらひな花をかかみ

舟橋

うき舟の藻花をかかみ

あふ鳥雲

うき舟の藻花をかかみ

田菘

藻の夕暮ちりし花をかかみ

嵯峨

藻の花

藻の花

百合

・しめゆり・きゆりのきり・鬼ゆり・結多ゆり
・うねこゆり

山もれよとてよ百合のきりりけ

已随

竹もえんは是よまの葉にけり百合のきり

甘蔗

忠もあやまよとてよまゆりのきり

風竹

百子のきりけりまの葉にけり

三交

・四つ子のきり

紫陽花

紫陽花を古無下葉きりり

古波臨

ゆもれよとてよまゆりのきり

古籙金

まもれよとてよまゆりのきり

金樞

蒸気

ゆもれよとてよまゆりのきり

尾村

ゆもれよとてよまゆりのきり

越山

まもれよとてよまゆりのきり

然比

あもれよとてよまゆりのきり

液之

まもれよとてよまゆりのきり

菓次

紅の花

・本花系

ゆもれよとてよまゆりのきり

菅唐

ゆもれよとてよまゆりのきり

下カ

ゆもれよとてよまゆりのきり

信之是を源書

花を人よききりて花を人の花 花

花を花を雨を雨の日の花を花 花

眼の中を花を雨の思ふ花を花 花

昇る日や花を花を花を花 花

花を花を花を花を花を花 花

花菖蒲

梁の武帝の母張氏菖蒲をてん花を生きて光彩照
物も世にやあふ花を人に見て白雲を
多老やまに富貴をたふ花を 倭てりて花を花を
生を [年] 菖蒲の属ありて花を菖蒲は花を花を
色を花を花を花を花を花を 花を花を花を花を
花を花を花を花を花を花を 花を花を花を花を
菖蒲は花を花を花を花を花を 花を花を花を花を

菖蒲の花 花を花を花を花を花を 花

花を花を花を花を花を花を 花

花を花を花を花を花を花を 花

花を花を花を花を花を花を 花

花を花を花を花を花を花を 花

花を花を花を花を花を花を 花

花を花を花を花を花を花を 花

紫羅欄花 花を花を花を花を花を 花

補と云一種候節は生を根皮を片摘みたりとの漢語あり
俗に身をこめぬ草と云 田 白草草を皆摘みたりと云
生花は赤花 根葉のくちのあり 白草草ありしは花紅あり物なり
草と云ふは根をいへり

似しはしきその物をもむりやめ 桐左

あしきなり屋よれ合し草あり花 佳草

石 菖 名草や花をうり佳し味をうり花 沾嶺子

忘草の花 へんそ子の草あり。草叶貞性白葉をつきし
叶といふはあり

草叶の草と汁やうき花叶 右 東山

金 銀 花 思をの草あり。まのうらぐも云

毛うらぐ咲けよまのはし草銀花 下 玉 碩

竹林の園をいふ草や金銀花 金 暉光

思をの草や葉りを摘はく草 下 玉 徳

朝 菊

苗をを登り長生よ草四五尺茎細く葉よりて葉延ぶる
あしき葉も志やよねては草あり 葉をうりて漢語を草と云
同 思をの草をいふは初め葉のありて草と云ふ 四五月葉

朝 露 草

一名朝露草と云花の形括よねく小く花白くくちのあり
唐よ思紅のまをいふは思ハニの草出西所の草と云ふ
思紅の草と云思紅をいふは思を裂て思のありて
思ふに形を名よ云本名思紅草と云

蚊 帳 草

夕はよ蚊帳草のそよ草也 桐 左

酸 漿 の花

よの草の草あり

早松茸

花より子に濃きをせし早松茸 下葉弓
雨の足残足て送るたり早松茸、糖中
写葉よふく味あり早松茸、其岳
志し初る出さ六種之早松茸 重不二九
味越え出さの汁や早松茸 花地
夏あり傳ふと云ふは是より聖矣云と和會物より
佛あり傳ふと云ふは是より困六種あり和會の菓ハ四種之
赤根茶種菓ありまづの菓ハ
不種あり

菓

赤根茶種菓ありまづの菓ハ
不種あり

あせしはふ松茸のつらき菓の味 是連
人さすめは松茸の味 菓をけ 優と

馬齒莧

馬齒莧の葉より
馬齒莧の葉より

茄子

根をたたくはく日種は虎杖より菓 菓種
すくもはぬ同は種は茄子より水 一止
をくく大さく志する茄子より水 一止
あつたはしし了はる初茄子 下葉連
苗より重なり連はる茄子 重 文種
たしあきく物めつらし初茄子 一葉左
和會のすくもはぬ同は種は茄子 下葉連
あつたはしし了はる初茄子 下葉連
苗より重なり連はる茄子 下葉連
たしあきく物めつらし初茄子 下葉連

若竹

淡竹の若くは節の粗くする

上毛 三津女

この竹のふしを葉はたりの雪の舞

上毛

若竹の若くは節の粗くする

上毛 白糸

世を散く 隠者の雪やふりし

上毛 為山

竹まきもすこし葉はたりの雪

上毛 為山

仲色葉を葉を葉を葉を葉を

上毛 葉吹

陣より竹まきのめしき竹植

上毛 泉壺

代はるる竹の田はるる竹

上毛 竹依

葉を葉を竹まきのめしき竹

上毛 竹依

田植

あまのよ竹まきしる竹まき

上毛 松園

竹陰あく田植のめまはるる

上毛 仙衣

本より竹まきしる竹まき

上毛 養化

早乙めの竹まきしる竹まき

上毛 松隣

早乙女竹まきしる竹まき

上毛 見外

竹まきしる竹まきしる竹まき

上毛 等我

竹まきしる竹まきしる竹まき

上毛 若妻

女まきしる竹まきしる竹まき

上毛 素月

若くは竹まきしる竹まき

上毛 若史

田唄

早苗取

早苗取の竹まきしる竹まき

上毛 素月

若くは竹まきしる竹まき

上毛 若史

若苗

吹きよもあはれむしとくものこも苗成
若苗や花はよある木の枝を伐る
この苗の色よも花や子種あはれ
優々

青田

やまよふららしく小島の青田うれ
眼よ黒くさるのきつて青田うれ
二と枝あまのふよも青田うれ
りきよふ花畑う布あはれ青田うれ
秋は
秋は
月花のふよ青田のちあはれ
古一賢
六境山

夏草

麦刈しはれも青田と花よ布り
花水

田草取

川裁しは青田をさるる花うれ
暉永
花水

粟

汗まきよ泥まきあり田うれ
不由

蒔

粟蒔や目の花をさるる一をら
麻舟

・釋・和・胡テホキととハ五月
刈六八月あり

菽植

粟アワビもきくやアワビもきくは根細く優ユク

畔ササすくもきくは地ハあく蒔ウツクうゑる 文種

蒔ウツクうゑる地を黒くは地瓦うれ 閑谷

蒔ウツクうゑる地を黒くは地瓦うれ 赤梅堂

空菽曳

空豆を曳ヒキくは地を黒くは地瓦うれ 庭花

空豆を曳ヒキくは地を黒くは地瓦うれ 龜成

空豆を曳ヒキくは地を黒くは地瓦うれ 花海

空豆を曳ヒキくは地を黒くは地瓦うれ 麦香

繡線菊

園木ととも二種ありともは五月迄花をひく真紅

集り候日中よはなを花をせり

夏草

夏草のつ草のつを根のきく世じ花 優く

夏草のつ草のつを根のきく世じ花 連里子

夏草のつ草のつを根のきく世じ花 赤子子

夏草のつ草のつを根のきく世じ花 赤子子

棟花

圍梅檀とともハ誤ありせんたハ檀まは棟の言のけり

雨のあたる世のたまひやを棟 瑶美子

雨のあたる世のたまひやを棟 赤子

雨のあたる世のたまひやを棟 磯向

宵行

園田の巻を五月廿七日お一巻一夜迄二巻又一夜
より三巻迄後宇治巻あり

ふく光る巻をのりや川むらむ 古 岩白

正のくもはる木をてき巻う丸 京 漁藤

ふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ 、 踏床

巻をえて山のむらう打をり巻 、 樹竹

よき巻の光りやよき巻う丸 、 医以

雑魚う返し巻をりや巻 、 菅廣

巻下り巻をりや巻 、 間山

町巻 、 暉尔

鳩の浮巢

巻の巻は地は廣より 、 ちのら

巻 、 木送

人 、 巻

巻 、 芝葉

巻 、 水

巻 、 文定

巻 、 巨月

巻 、 核

巻 、 松

火串

雨多しむ雪やまをりのきりりり 下サ 柳翠

宵書の未の希よ成る 下毛 一飛

身をよせる未花もまを 下ハ 海曉

身よりのけり 下サ 以足

雨多しを串のうり 一 字

見つた 一 庭

流川よ ヒタチ 淇

なる 一 井

よ ト毛 雲

風書 茶交

収易 五 風

方 方 糸

共 共 削

得 得 糸

掃 下サ 外

墓

月 ト毛 外

掃 下サ 外

廻身吟及をたきさ
一ふりよるん

スラモム
曹

隣戸汲水をりの水能うく

水壺

うもを倉のましくやうとたきく身うりうくやうつり
是短く毛りり木の相或の葉土の赤よきく老赤葉肉
の葉一旧芽屋上よきくその外白く肉うもみもあう皆黒熱
の葉一葉葉一々化生まよるり秋よ入る懐了懐とある

葉葉のよきくそのまはは 曹 水壺

合歡の花

萱村うけ利留の葉一極の葉 文冊

こきこきぬおあうり時あり合歡の葉 酒壺

六月

六月の葉・風竹月・あつり月・常夜月・林鐘・此月
飲月・臨水・あふ月・月よよ遠きをこつきとどろ
六月月うらや一早苗のう水つきくさつらとよあさう直臣
云は月律林鐘よりらなる月一を持のまよえとててはまら
をそりのうゆい洲よいん
らつる漢あり 曹

六月や峰よ雪あくらら 山 篇

六月やあつり多きまきり 古 篇

六月やあまくさりのよ供くまら 由 篇

六月も多し一夜の風鈴の音 文 種

六月の思をよきく木川うれ 下 篇

水無月

水無月や網はらきくも塔くら 篇

水室月の年より世一休生島 古 去来

とね月よりあき物とせん富士の雪 一 深菴

水室月の夜もすけはへりてふ 一 龍水

水室

贈一日水室沖洲・水のおもひ・水あはれま・水室の雪
・水室のまゝら・水解屋もま真陸云水室の水八月一日
より九月までありて・秋まら・抱ふれとも八月一日を肝要と利
故と目よ定まありて・まら予有葉も四月より・秋もまら延喜式
主水式もまえりて・契月高舟も八月換りて・水を利もまひのお
もりまらあり・保氏常・友のまらも水あはれまら・傳りま集
よ水室のまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
おのころの世伝も水をちを水と推へて・秋月より利まらまら

開く日も裏白もまら水室の乳 古 梅室

二月の密柑とせらり水室の雪 古 言水

水室の思ひも水室の乳 尾村

水室の動も水室の乳 梅室

水室の光も水室の乳 芳州

水室の梅も水室の乳 山雪

水室の葉も水室の乳 芳流

水室の汗も水室の乳 子桑

水室の雪も水室の乳 竹友

水室の御飯を供ま 一日忌日とく不浄の火をたしめりて八月

忌日の御飯を供ま 一日忌日とく不浄の火をたしめりて八月
是神今食の由神もりをまらまらまらまらまらまらまら
水室の御飯を供ま 一日忌日とく不浄の火をたしめりて八月
是神今食の由神もりをまらまらまらまらまらまらまら
水室の御飯を供ま 一日忌日とく不浄の火をたしめりて八月
是神今食の由神もりをまらまらまらまらまらまらまら

夏氷

氷室の櫻

忌日の御飯

巖島祭

藝州佐伯郡宗島より十四日あり

竹生島祭

十四日十五日あり其祭を法義云と云休生島神社と云契
沖湫一里あり圍竹生島を江州湖中より一里あり

精宝珠多し一本
女まろの氏一あり

山王祭

圍江戶浦池の上永田馬場より例祭六月十五日山王祭を
神田祭と隔年よ其祭を以て神樂三基甲冑の法師
騎馬の警外樂の古後よお後し氏子よ形よ所の法度しきり
奉の武士を以て 穀槍を立列して 祥しきり 神樂の后西永田
馬場より半孫門を入上境場を以てり 竹橋山を以てり
過り常盤橋山を以てり 運幸あり 〇其祭を沖用あり 〇修し云
りり中橋を以てり 運幸あり 〇其祭を車牛より其り
公の産神あり町中 鬼取出書を以てり 〇其祭を車牛より其り
あり 附祭の當志町を以てり 屋臺祈りその地を以てり 踊未を以てり
町役人の麻上布を以てり 〇其祭は美風を以てり 〇其祭を
ハ交り 〇其祭の祭り

山王祭の祭や何事か人よ 人 水壺

山王祭の祭りやその又何事か 狐 什

相國寺懺法

十七日松風後山松鏡を用由孫若しと云是のく休米
肉の妻附まを云ありと云

祇園臨時祭

十五日依殿上の五位奉遊を以てり 又まり馬物奉あり
と云 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり

嘉定喰

十六日 嘉定喰 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり
控後あり 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり

彼世中よ福なり 故よ今よ又云てり 〇其祭を以てり
云今十六日祭を以てり 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり
〇其祭を以てり 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり
〇其祭を以てり 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり

家よそのよあり 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり
〇其祭を以てり 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり
〇其祭を以てり 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり
〇其祭を以てり 〇其祭を以てり 〇其祭を以てり

何れもく河にさすりたれ嘉宝元年 川城 松原
健を互に架りて 嘉宝元年 文里
茶の料は是れぬむをいし嘉宝元年 不由

かほり

湯谷河にさすりたれ嘉宝元年 川城 松原
かほり

のり 迎分おゆきて 一りぬ 葉雅

伊勢の祭禮 十日自後會余をまつる十七日自林 是をまつると云々
今日出家者數の多しは亦亦多しと云々

博多祭

十日自十七日ありの能事博多
板田林社のまつりあり

志渡寺祭

十五日あり十七日あり漢波
補陀岳山志度寺の祭あり

五頭納涼

廿九日あるは望月のりしあり遊末は雨を納涼積増
廿月十六日と今日あるを執りては雨夜の祝
五の母公遊蕨の
遊風ありと云々

富士詣

一月より廿日ありあり富士市ありと
廿四五月あり

宵やまの志のゆきしの清くは 華子

月と目外ハ是れ中を不冬 古 車 池

お宿やとの間とありあり 古 智 函

身心よりとありあり 古 某 史

見悟よりとありあり 古 下 外

りんとありあり 古 今 貴

はくをり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり
あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり
あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり
あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり
あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

御被

川浪は秋のすまゝなる 山被うれ 上毛 心星

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

夏越の被

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

被草

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

形代

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

茅の輪

あまのこをさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり 竹をさうり

此は... 後よちの... 神を...

古岳 神

智 幽

柔 交

一 笑

下 廿 甚 光

夏神樂

川社... 夏神樂... 神を...

水 舟... 由 儿

花 月

神 樂

日 神

山 社

優 々

川 社

川 社

文 祀

文 祀

彼 洞

山 社

鷹羽遠を習ふ月

おつこのしの月傳ゆまき水の望うれ

祐

大暑の節

白月のチヨクレヨ溽暑

明不結を楸枝垂る暑きころ水

巨月

日の出より暑き際の方より水

古奈比

暑きとせむる暑きとせむるや敷このし

芳州

月の出るときのつきの吐く水

香花山

石のつきのほ場をの暑きころ水

全

村も暑きとせむるや暑きの中を影

荒月

浦の暑きとせむるや暑きとせむる、賢外

近きもの物う希むあき暑きとせむる、酒我

巢の傍の暑きとせむるや暑きとせむる、イッ五灰

暑きとせむるや暑きとせむる人の影、手セの立

身をよめる杉の暑きとせむるや暑きとせむる、風什

板のつきの舟の灯は風とせむるや暑きとせむる、久菜

馬も暑きとせむるや暑きとせむる、何のさう水、ハツ文靴

志わたりし暑きとせむるや暑きとせむる、下サ庭花

炎天よ舟も暑きとせむるや暑きとせむる、全山雪

炎天

日盛

笑天や何處へありし曲の雲ハツ壯山
 笑天や身のりしハ重むら奉め
 日さのりや牛の何ゆきのおれつら古養子
 日暮や人さるもなきの下舟舟管管玩
 日暮や岸さるるけり舟海海語
 日さのりや長ふのりする一日一左
 日さのりや舞鶴鳥のそと一自一文文種
 日さのりや松多入入雲雲乃乃のり
 日盛 純日の何くるあり素山
 素山

父立

● 圓る時よりとらり
● 夜立

夕立よやうりおをる女古の古那那角
 夕立の何やや松のの芳さけ芳素素嶺
 ゆふ立はたをせりし霜をたき霜岩岩
 夕立や隣まをたき雨やト外
 白雨や雲分ふある下毛毛山山古
 夕立や繩をたき舟の舟山山古
 夕立をたき舟の舟山山古
 夕立も木陰は志のく山左

夜立

たのむし海客も友よのまうゆか 偶水

権のまは落着き居るのさむら 下サ 偶水

月を清くおのりしるや 兼 兼 兼 兼

月のきけ方へあまうたのむら 兼 兼 兼 兼

竹婦人 眠るまをさるるをいやは 兼 兼 兼 兼

夜明けの風のあまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

竹婦人 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

籠枕

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

涼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

あまうたのむら 兼 兼 兼 兼

納涼

す〜や草の細乃七曲り ハツ 花子
 さ〜やささ〜のささ〜夕暮 ハツ 花子
 さ〜やハ草の影を写すなり ハツ 花子
 薄〜ささ〜のさ〜水のおと カ 花
 さ〜や松の古葉の怪へ出る 下毛 松圃
 す〜や〜人ハ蜂の蜂の如 下毛 五英
 さ〜や〜木の強弱よりさ〜 下毛 不
 さ〜や〜のさ〜 下毛 西馬
 一日の海よりさ〜さ〜くれ 下毛 西馬

夏 瘦

内庭やささ〜む手袋のあ一花 下毛 花村
 雲日の夜社ハ教をさ〜納涼 下毛 花子
 風嬉ふさ〜のゆふ屋のさ〜 下毛 花子
 松の雨をさ〜のゆ〜さ〜み〜 下毛 花子
 有ゆさ〜さ〜むさ〜お提げ 下毛 花子
 門のさ〜さ〜さ〜のさ〜 下毛 花子
 空ら〜さ〜さ〜さ〜 下毛 花子
 印ハ〜さ〜さ〜 下毛 花子
 夏服やさ〜種々の何事 下毛 花子

夏夜又涼の十景もあはれ結せたり 下サ 暑気

夏やせをせぬもあはれ思ひうれ △サレ 暑気

夏やせのしと暑しや雨の音 三交

青嵐

秋の川も青嵐の上をまきゆらし 文雅

青嵐の風宿をぬれ熱を吹きとりの 東史

風薫

南薫の月も吹流風あつち南薫の峰よりあつち 水風流を
ひくくまきくく 幻住庵の記にあり又薫風自南薫と

固詞よ
あま

風のまも青嵐のちのり 家止川 菊

木の間もや晴あはれく風のをま カヒ 東

雲の峯

雲のりて霞美は風のりをりけり 爽史

秋の夕に霞白のりをり風薫る 孤眠

山間のや海もあはれ風のをま 函山

名阪をのあま風のをま 菓欣

夏夜多雲峯と閑閑のり 詩は有貞屋云六月閑目の時分
雲のりて夕に霞のやうなるを云り 贈

あまのりて霞のあや 雲のり 一法

根を海もあはれ 雲の峰 五共

むらあまのり 雲の峰 上毛 蘇外

可上川の白あはれ 雲の峰 重 板佳

眼を動かすは清い水もよくて雲の峰 契史

雲の峰の思ふは清い水の峰の如く 下毛 兼光

雨をくくありふ日雨や雲のくく 一 泉 欣

ありくくや清い水も清い水と 古 其 角

歩水や歩水清い水の人 通下 龜 遊

古板やよき水も清い水 祐之

足中ふくや清い水の清い水 重 約

水もや歩水の清い水 平 宮

清水

清い水も清い水
清い水も清い水

泉水

川の水の清い水も清い水 思 成

川の水の清い水も清い水 思 成

超 鶴

超 鶴 川の水の清い水も清い水 思 成

超 鶴 川の水の清い水も清い水 思 成

山間の水も清い水も清い水 素 月

山間の水も清い水も清い水 素 月

花 菜 庭 得

庭 得

蝉

蝉 庭 得

雲雀鷹

雲雀鷹 庭 得

鬼虫

怪し人の方へまゐりて鬼虫ト 後友

秋隣

川は流るる秋を隣にまよふ風 一求

秋迹

夕の影や秋をゆくまはる影 田係

秋の法をゆくまはる影 葉吹

夏の雨

夏の雨ふりてまはる影 自八 橋糸

夏坐敷

夏の坐敷にまはる影 扇

夏ノ月

海をゆく風の影やまはる影 テハ 雲山

のち夜船

船をゆく風の影やまはる影 扇

舟の影やまはる影やまはる影 扇

舟の影やまはる影やまはる影 扇

舟の影やまはる影やまはる影 扇

舟の影やまはる影やまはる影 扇

舟の影やまはる影やまはる影 扇

夏終

振の葉は河をせよとて夏の間 ハナニ
 不と事世に法をよとて夏の間 アキ
 人の葉は河をせよとて夏の間 トサ
 破鏡の影をよとて夏の間 古
 市中の葉は河をせよとて夏の間 凡
 何れもよとて夏の間 嵐

秋

砂をよとて秋の間 飛
 葉をよとて秋の間 山
 竹をよとて秋の間 山
 葉をよとて秋の間 永
 葉をよとて秋の間 芳
 葉をよとて秋の間 一
 葉をよとて秋の間 南
 葉をよとて秋の間 葉

のちまたよきよー 又ゆきよのちまたよきよー 又ゆきよのちまたよきよー
云又とてころんと 漢字もあつていふあつてー 又ゆきよのちまたよきよー

素朴なまの 松のまのまの 松のまのまの 松のまのまの 松のまのまの
古風調

心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村
雲村

心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村
寺素徳

心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村
定月

心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村
晨風

心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村
風城

心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村
龍祐

心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村 心を練の村
山

海と山と花と木の心と古と水と

不卜の甘地巻

水と山と花と木の心と古と水と

水と山と花と木の心と古と水と

水と山と花と木の心と古と水と

水と山と花と木の心と古と水と

水と山と花と木の心と古と水と

水と山と花と木の心と古と水と

砂糖水

道明寺

水粉

葛水

林檎

味しの起るるる林檎の形

空駒

風より小鳥の如くをりてまじりて

優

百日紅

蓮の葉は赤く花は紅く百日紅

下サ 玉佳

思ひの如く豊白あやも百日紅

思成

花魁の如くもや新を百日紅

思成

子も同じく新をの如くも百日紅

八九輪

一枝も咲かぬ百日紅

意定

瞿麥

やまもあやこころらけりて一・川原接子・増えりて
夏まてりて・常夏夏名

接子や継ぎは永き花

夏三

蓮ノ薔

蓮の葉根の子あり

接子の心は蓮の心とて風をこゆる

上毛 白薔

花の心のうちには蓮の心とて蓮の心

花將

存かよやりのつぎは蓮の心を

水登

寺の心も蓮の心とて蓮の薔

葉吹

蓮

花の葉・蓮の心実直後云蓮ハ花ハ実を具一了らるなり
蓮の心も蓮の心とて蓮の心とて蓮の心

蓮の心を蓮の心の後や蓮の薔

素花

花の心を蓮の心とて蓮の心

素花

蓮の心を蓮の心とて蓮の心

素花

蓮の心を蓮の心とて蓮の心
テハ 蓮の心

蕪

澤オモ
瀉タカ

水々を伸えきくあり此の蓮ハツ 竹嶋
 蓮おしく青物起しヒクテ 源水
 蓮のこぼれ根の志く川エ 文志
 丘をさぐ人の手をしんをさのむ金 茶交
 うんうんお物りあらしを蓮の花上サ 春松
 澤瀉やあつらひをさし下サ 貞忠
 おもたのむ根をさし下サ 智幽
 澤瀉おのれおをさし下サ 壯心

骨カウ
蓬オホ

菱の花

蒲の穂
海松ミ

あふたふ丹の巻しハミ 文志
 澤瀉や海をさし下モ 梅左
 海骨のそを候下モ 如白
 川をさし下モ 馬空
 海骨や馬扱抄下モ 睡風
 けんふさのせ下サ 甚岳
 海骨をさし下サ 油静
 蒲の穂下サ 優々
 うみまら下サ

蘭を花
おろしや影もくさき残りのこる
おろしや影もくさき残りのこる
龜水

言 芒
おろしや影もくさき残りのこる
乙 二

風 蘭
おろしや影もくさき残りのこる
龜水

風をぬく
おろしや影もくさき残りのこる
龜水

風葉や老のこけりむ言の先
龜水

眼 皮
おろしや影もくさき残りのこる
乙 良

凌宵花
おろしや影もくさき残りのこる
楓 悦

日向葵
日向葵
日向葵

玉簪草
玉簪草
玉簪草

麒麟草
麒麟草
麒麟草

釣鐘
釣鐘
釣鐘

花
花
花

花
花
花

射干 シヤカニ

かすまふき。うらまをあげて
いあふき

射干のくもくも種子のこまき一葉 カ 希因

紫蘓

ほろりぬ白むや志その赤木を苗 重 鳳友

色も赤木をあげて決まらぬの二葉ハ、 重 如水

綿ノ花

綿のくもはせたまき雨のふきを降 重 由藝

虫おとり溜し在伝や綿の色 重 氷香

青鬼灯 アヲホウシヤ

丹津をまきわつきの虫の世話 重 一球

青蕃椒

青蕃椒のくもは白むや唐のし 重 西几

漆搔 シヤカニ

贈 漆搔のくもは白むや唐のし 重 西几

同 同よりや。漆搔は名生漆汁より奥州及び下野に産す。其の葉は
西のくもは白むや唐のし。法は唐の六月に産す。九月に赤むや
ハ、漆搔のくもは白むや唐のし。法は唐の六月に産す。九月に赤むや
をくもは白むや唐のし。法は唐の六月に産す。九月に赤むや
をくもは白むや唐のし。法は唐の六月に産す。九月に赤むや
をくもは白むや唐のし。法は唐の六月に産す。九月に赤むや

搔ハ粒とく思ふは粒らじしあり 重 士教

不孝の意はまきわつきのやう 重 波路

宿引のくもは白むや唐のし 重 氷香

漆のくもは白むや唐のし 重 樹石

山影をまきわつきのやう 重 樹石

竹の皮取

新

青瓢

川狩

しる敷やいさう能上よ候あまき。 トウ 岩

ちりまの トウ 玉

ゆの糸引を トウ 孤成

知の ヒナチ 素月

せ トウ 一葉

葉の トウ 一求

新 トウ 飛

川 トウ 貴山

川 トウ 雲

夏百三

川狩の トウ 思成

川 トウ 怪風

越鶴 トウ 怪風

越鶴 トウ 怪風

岩 ヒナチ 素月

山 トウ 由儀

花 トウ 花葉

雲雀鷹 トウ 飛

蝉

蝉 トウ 飛

蟬をくわしけりしと云々の風 上七 一色

日よりの蟬 平五 暮宝

志重くし貝山の蟬は授けし ハウ 文記

高の樹にしるる蟬 下毛 兼欣

蟬をくわしけりしと云々の蟬 ハ 瑞松

空をくわしけりしと云々の蟬 佳 民

空をくわしけりしと云々の蟬 由 儀

空をくわしけりしと云々の蟬 馬 水

空をくわしけりしと云々の蟬 又 蟬

夏百四

空蟬

夏虫

空をくわしけりしと云々の蟬 古 關更

空をくわしけりしと云々の蟬 夏 虫

空をくわしけりしと云々の蟬 下 水

空をくわしけりしと云々の蟬 上 水

空をくわしけりしと云々の蟬 下 毛

空をくわしけりしと云々の蟬 上 毛

空をくわしけりしと云々の蟬 上 毛

空をくわしけりしと云々の蟬 上 毛

火蛾

空をくわしけりしと云々の蟬

上毛 五 頁

夏
終

極の夢はしるをせしはては夏の月 ハサ 露成

ふりあせしはては ハサ 萩丸

夢の夢よはては ハサ 書朗

人夢の極をふりあせしはては夏の月 ハサ 折葉

夢の夢は ハサ 波靜

破睡の夢 ハサ 小枝

市中 ハサ 凡兆

何了 ハサ 龍雪



